



美人教師が

催眠術にかかったら

ふりて露出授業が

止まらない

ねこらった

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

サンプル（スマホ向けフォント版）

目次

-
- 一 実験台のスカートと「ねじ曲がる」欲望
—— 催眠アプリはインチキなのか？
 - 二 清楚な美女の裏側
—— 深夜の鏡と「ドスケベエロキョウシ」
 - 三 メタリックレッドのボディコン授業
—— これは「職務」です
 - 四 教室で脱ぎ捨てたドレス
—— 「言い訳」という名の快感
 - 五 校長室でのプライベート・レッスン
—— 止まらない衝動
 - 六 深夜の屋外露出
—— 高速道路を見下ろす「怪物」
 - 七 極小紐水着と教卓の上の狂宴
—— 特別性教育
 - 八 「ギリOK」な放課後
—— ブラウスの下秘密

サンプル（スマホ向けフォント版）

一

実験台のスカートと「ねじ曲がる」欲望
——催眠アプリはインチキなのか？

ほりこれ

堀是市立第六厨学園。

十八歳以上で童顔の者だけが通うことでよく知られているその公立特殊教育機関は、特急が止まる最寄りの大きな駅から歩いて十分弱、商店街が途切れ住宅街に入って少しのところにある。

梅雨も終わりが近い。体育館の裏庭には雑草が生い茂り、雨水が溜まった小さな水たまりが点在している。アスファルトは雨に濡れて黒光りし、空気は湿った土と植物の匂いが混ざり合っている。今年はこの時期でも既に蒸し暑い。部活をサボった三年生の男子二人と女子が一人、溜まり場であるこの体育館裏庭の倉庫でダラダラと時間を潰していた。

「暑ちいなあ」

積み重ねた体育マットの上に座った男子の一人が制服のシャツをはだけ、下敷きでバタバタと扇いだ。

「マジ暑い」

「暑い暑いうっせえよ、こっちはもつと色々着てるんだ、男と違って」

漫画雑誌を読んでいた女子が乱暴な口調で文句を言った。

「色々って？」

「色々だよ」

「佐藤も脱げばいいのに」

「うっせえ、アホ」

「ふーん……あ……！」

男子は何かを思いついたのか、スマートフォンを取り出し、操作をはじめた。壁に落書きをしていた男子もそれを中断し、一緒になって何かに熱心に取り組んでいる。

「『やらせたいことに近いキーワードを十文字くらいで入れる』……か……」

△フクヲヌグ▽

「おいおい、モロだな……お、設定完了だって」

彼等はスマートフォン画面を女子に向けて言った。

「佐藤、ちよつとコレ見てみ」

「んー？」

佐藤と呼ばれたその女子は、漫画雑誌から視線を外し、男子のスマートフォンに興味津々で顔を近づけた。

画面いっぱい、極彩色の幾何学模様が蠢いている。最初はただの派手な動画に見えた。だが、見つめた瞬間、彼女の眉間がピクリと動いた。

「なにこれ……目が、チカチカする……」

視線を外そうとした。けれど、できない。

回転する模様の奥から、泥のような色彩が溢れ出し、網膜を通って脳髓に直接流れ込んでくる感覚。

「ちよ、やめ……気持、ち悪……」

抵抗の言葉は、尻すぼみに消えていく。

女子の瞳から理性の光が吸いだされ、焦点が合わない視線が宙を見つめる。口元はだらしなく半開きとなる。

「……かかった……？」

男子たちは、彼女の様子を見て、催眠術が成功したことを確信した。

「……っばいな……よし、佐藤、暑いよな。スカートめくろうぜ！」

スマートフォンを持った男子は、少し興奮した様子で、彼女に命令した。

彼女はまるで操り人形のように、こくりと頷くと、何のためらいもなく自らスカートをめくり上げた

「おおー！」

……しかし男子二人の期待に反し、スカートの下は体育のときのハーフパンツだ。

「なんだよ……。佐藤、体操着も脱ぐんだ」

佐藤の目に光が戻る。彼女は油断していた男子の鳩尾に思い切り拳を叩きこんだ。

「調子のとってんじやねえよ、ボケッ」

「うぐぐ……モロ入った……かかつてなかったか……」

「つたり前だ！　つかそのアプリ見たことあるし。『メスメル』だろ」

「ぐぐ……催眠アプリ……やっぱインチキか……やべ、マジいてて……」

男子は腹を抑えて前かがみになる。

そして、女子はおもむろに自分のスカートの中に両手を差し入れ、ゴソゴソとハーフパンツを脱ぐと、それを彼に差し出した。

「ほらよっ……ふう涼しい……あれ……？」

彼女は、自分が何故そんなことをしたのか全く分からなかった。それがまた無性に腹が立って、かがんだ男子の尻にもう一発、飛び蹴りを入れた。バランスを崩した彼が言う。

「あ、パンツみえた……！」

サンプル（スマホ向けフォント版）

二

— 清楚な美人教師の裏側
深夜の鏡と「ドスケベエロキョウシ」

梅雨が明け、初夏の強い日差しが第六厨学園の窓から差し込み、二年生の教室を明るく照らす。

放課後、健太郎と猛たち五、六人の生徒が、教室の後ろに溜まってスマートフォンで対戦ゲームに興じながら、例の催眠アプリの噂話をしている。

「なあ、聞いた？ 『メスマル』。三年の高橋先輩が佐藤先輩に使ったら、マジでスカートめくったらしいよ」

「あれに本当にかかる人っていたのか……」

「聞いた聞いた。高橋先輩、ボコボコにされたって言うから、催眠術は効かなかったんじゃない？」

「それが、ボコる前にめくったのは本当らしいんだ」

「わけわかんねえな。ボコるなら、スカートめくらないよな。かかったのか、かからなかったのか」

健太郎が声を潜めて、スマートフォン画面をゲーム仲間たちに見せた。

「掲示板によるとさ、どうもこのアプリは何でも命令でき

るわけじゃないらしい。催眠は魔法じゃない、みんな、催眠にかかると前からやりたそうだった事をやっていると。アプリは『抑圧された願望』を入力した『キーワード』の方向にねじ曲げて解放するだけのようだ、って」

「抑圧された願望？」

「そう。最近暑いし、佐藤先輩も『暑い、脱ぎたい』って内心思ってた、そこに高橋先輩の「スカートメクル」とか多分、そういうキーワードがハマってアプリが作用したんだ。んで、欲望を解放したら催眠も解けてボコボコ」

「すぎえ！ 名探偵あらわる！ じゃ、キーワードが超重

要だな」

「ああ」

「……でも、その、ガマンとかよくあつとか、そんなの外から分からないじゃん」

「だから効く人と効かない人がいるんだろ。キーワードに關することを何もガマンしてない奴には効かない、それを

ずーつと抑えてた奴ほどハマって反応がデカいって訳」

「……じゃ……もしかして、クラス中の女子に試せば誰かひとりくらい、エロいことしてくれるんじゃないか？」

猛がニヤニヤと笑みを浮かべて言い出した

「確かに。手分けして全員にやってみようぜ。学級委員とか真面目そうなやつほど効くかもしれねえし」

皆も猛の提案に賛同した。

「鈴木さんとか、何かこう……かかりそうな感じじゃね？」

「俺は渡辺さんいく」

「おい渡辺さんは俺だって！」

「いやいや渡辺さんは……あ、じゃあ俺、美咲先生！」

健太郎はクラス担任の若い英語教師の名を挙げた。同級生の女子の誰よりもグラマーで、テレビに出てくるアイドルのような顔立ちの物凄い美女だ。

「しまった、その手があつたか！」

クラスメートの顔ばかり思い浮かべていたゲーム仲間

が悔しがった。

「でも美咲先生、マジで超美人なのに、なんか地味だよな」
「それな。いっつも灰色の長袖シャツにロングスカート。
この蒸し暑いのに必ずダサイカーデイガンまで着て」
「あ、それってさ……さっきの『抑圧された願望』じゃね？」
猛がニヤリと笑った。

「『暑いし本当は薄着したい、お洒落したい』とか思ってるけど……何か理由があって……」

「うおお、ありえる！ あのスタイルだし！ 確かに、もしミニスカで授業されたら内容とか全然頭に入らないわ、なるほどそれは禁止されるわ、抑圧だわ」

「今でも英語の授業は眠くなつて頭に入らないけどな」

「それはいいんだよ。安眠できて。じゃあキーワードどうする？ エロく『ミズギデジユギョウ』とか？」

「いや、もつと直球でいこうぜ。『抑圧』を『解放』するアブリだろ？ 美咲先生の『本当は薄着したいけど教師だか

らできない』っていう抑圧をさ、俺らの願望の『エロ』でねじ曲げるわけだから……」

健太郎が、いたずらっぽくスマートフォンの入力画面を見せた。あまりにふざけた十文字。

△ドスケベエロキョウシ▽

「うわっ、なんだそりや！ 頭悪すぎる！」

「いやでもハマったらヤバくね？ あ的美咲先生がだよ、もし『エロ教師』になつたら……」

「『ゴクリ……』」

男子生徒たちは、誰が催眠にかかったら何をさせよう、だからキーワードはこうしようなどと、わいわいと盛り上がり、それぞれ部活に遅刻して、三年生の先輩たちに散々しごかれた。



「はあ……またまた、赤点だらけ……」

放課後の職員室で、美咲はため息をつき、答案用紙に赤

ペンを走らせた。生徒たちの成績が芳しくないことに、どこか寂しさを感じる。

優秀な生徒もいれば、そうでない生徒もいる。学力だけでなく、それぞれの家庭環境や、抱える悩みも様々だ。美咲には教師として、彼らの成長を導く責任がある。ただ、時には、自分の力不足を感じてしまう。今日も授業中に居眠りをしていた子を叱ったが、それは居眠りする程につまらない授業しか出来ない自分にも責任の一端があろう。（一体どうすれば、皆に英語を好きになってもらえるんだろう……）

美咲は、そんなことを考えながら、テスト用紙をめくり続けた。

健太郎ら生徒たちからの評判通り、彼女の着ている灰色の長袖ブラウスに黒のロングスカート、それにブラウンのカーディガンは、彼女の年齢にしては妙に地味だ。

美咲はずっと以前から地味な服を選ぶのが習慣になっ

ていた。まるで人目を惹くのを避けるように。

数学教師の大介が、その手にスマートフォンを十個ほど抱えて職員室に帰ってきた。

美咲と同期の採用で、決して美男子ではないが不器量という程でもなく、背丈だけはひよろりと高い普通の青年だ。青いワイシャツにベージュのチノパンを履いている。最近暑くなってきたのでネクタイはしていない。

「……あ、大介先生。お疲れ様です」

聞き覚えのある足音に、美咲がゆっくりと顔を上げた。その動作はどこかおっとりとしていて、慌ただしい放課後の職員室の中で、そこだけ時間が穏やかに流れているような錯覚を大介に抱かせる。

「お疲れ、美咲先生。……なんだか、今日は一段と大変そうですね」

「ふふ、そう見えますか？それがですね、さつき、居眠り

を叱ってしまった子が、放課後にわざわざ謝りに来てくれたんです。何か元気が出ちゃって」

美咲はそう言つて、綻ぶような笑みを浮かべた。その仕事に、彼女の穏やかな人柄が滲み出ている。

「これ、その子が『先生、喉お大事に』って。大介先生も、一ついかがですか？」

彼女が華奢な指先で差し出したのは、可愛い包み紙の飴玉だった。

「あ、こりやどうも。ありがたく頂きます」

受け取る際、指先が一瞬だけ触れそうになり、大介は慌てて手を引いた。

彼女の纏う空気はあくまで清廉で、打算的な色気など微塵もない。だからこそ、大介は彼女に対して「綺麗な人だ」という純粹な感嘆と、それを直視してはいけないという妙な自制心の間でいつも揺れ動いていた。



大介は、抱えていたスマートフォンを机の上にガチャガチャと置き、受け取った飴玉をポケットに入れてついだに美咲の横顔をちらりと見た。

透き通るような白い肌、整った鼻筋、そして長い睫毛に縁取られた潤んだ瞳。映画女優のようなその横顔に、いつものことながら大介は息を呑む。

うつむいてペンを走らせる拍子に、艶やかな黒髪の隙間から雪のように白いうなじが覗く。地味な布越しでもわかる豊かな胸の膨らみと、華奢な手首のコントラストに、大介は無意識に視線を吸い寄せられ、慌てて咳払いをした。

（あ、いかん、いかん、同僚をそんな目で……）
「そういえば美咲先生、先日の、同期での飲み会の話、ご都合どうですか？」

美咲は迷った。

（大介先生の誘いか……。この先生は、他の男の人と違って、こっそり私の胸を見る時も視線が不思議とベタベタし

てないし、話す時にはちゃんと『私』を見てくれるから、嫌じゃないんだけどな。でも、やつぱり、夜の夕食は酔っ払いが多いし、ベタベタ見られそうで……」

「えっと……ごめんなさい、しばらく家の用事が詰まってる……それより、そのスマホは……？」

「そうそう、これこれ。先生のクラスの生徒達から取り上げたんですよ。大騒ぎしてまして」

「え！？　うちのクラスで？　！　どうしたんですか？」

美咲は、ぎょっとして尋ねた。

「催眠アプリですよ。最近流行ってるそうで、男子どもがこれで女子に催眠術をかけようと追いかけて回して、大騒ぎ」

大介がスマートフォン画面を見せると、鮮やかな色使いの点滅する幾何学模様が回転し、退屈な電子音が流れている。

「催眠術……ですか？　はあ……後でまた叱らないと……ん？　！　……あ……これ……」

美咲は、その画面に見覚えがあった。

「これ、このグルグルしてる模様……私も今日、生徒たちに散々見せられましたよ。次から次へといろんな子から十回くらい……『最新の眼精疲労回復アプリです』って言うてたのに、そういうことかあ、もお……。見つめてたら何か、頭の後ろがポカポカしたし、目に効いたような気がしてたのに……騙された……」

「わはは、美咲先生はその手の胡散臭……ゴホン、目新しい健康グッズが大好きですからね、上手く担がりましたね」
「お、なんだい、それは？」

職員室をぶらついてた学長が、その会話に加わった。白髪交じりの髪を撫でつけ、上等そうなスーツだが首元には少しだけ緩んだネクタイがぶら下がり、いつも柔和な笑みを浮かべている。

「ははは、催眠術で。マジですか」
流行りのアプリについて大介が説明すると、学長は苦笑

いしながら、いつもの、歳の割に妙に軽薄な口調で言った。
「えっと、それ、実際に効力はないんですよね？ 私、何
回も……結構、長々と見ちゃいましたけど……」

美咲が言った。

「もちろん、効果なんてありませんよ。そんな便利なものがあつたら生徒指導がどんなに楽になることか。是非、明後日からでも早速使いたい！」

大介は三年生のクラス担任、もうすぐ修学旅行の引率で京都市行きた。

美咲はまだ引率の経験は無いが、毎年、生徒が四、五人は夜中に抜けだしたり現地ではぐれたり大変らしいことは聞いている。数年前には帰りの新幹線に乗り損ねた生徒が出たとか。

「そうですよね、私も使いたいですね『あなたは英語の勉強をしたくなる』って。……あの子たち、私にどんな催眠をかけるつもりだったのかしら」

「はは。阿呆な男子生徒どもが美人先生にかけたがる催眠術なんてそりや……：そうだな、『美咲先生、水着姿で授業して！』とか、そんなのばかりですよ、間違いない」

ニヤけた大介のその言葉を聞いた瞬間、美咲の脳裏に、水着姿で授業をしている自分の姿が鮮やかに浮かび上がった。ハイレッグカットの真っ赤な水着、艶やかな黒い髪、そして、教室で大勢の生徒達に見つめられる自分の肌。心臓が、ほんの一瞬、早鐘のように打ち、頬が熱くなるのを感じた。もちろん絶対にそんなことをするつもりはないし、できないだろう。しかし想像するだけで、羞恥と興奮が入り混じった複雑な感情が押し寄せてくる。

「まさかそんなこと、しませんってば。って何ニヤニヤ想像してるんですか。あと、やめてくださいよ、美人とかそういうの」

美咲は、平静を装ってそう言った。先の想像は、心の奥底ではんの少しの間だけ甘く危険な魅力を放ち、そして消

えた。

「いや実際に美人なんだし、男子生徒どもも、間違いなく全員、そう思ってますよ」

「やめてください」

美咲が珍しく出した不愉快そうな声に大介はぎよつとして口を閉じた。

（美咲先生は、もっと堂々と……高嶺の花として、男どもを見下ろすくらいで丁度いいのに……）

それは、こんな美女は自分には手が届かないと端から諦めている大介の、せめてもの願いだった。

「……催眠術ねえ。私が若い頃は糸で吊るした五円玉だったけどなあ。最近は進んでいるねえ」

微妙な空気を温めるかのように、学長が話を振った。

「僕らの頃は『エロノート』でしたよ」

大介は、救われた思いでそれに乗る。

「もう……男子のそういう所って、変わらないんですね」

美咲も、今のはちよつとまずかったな、と内心思ってたのだろう、話に乗って明るくそう言い、一同は、それぞれの仕事に戻った。

後で返す時にアプリを削除させないとな、と、大介は、押収したスマートフォン画面を忌々しそうにタツプした。

催眠術なんて馬鹿げている。だが、それを使って「美咲に服を脱がせたい」と妄想し、あまつさえ実行に移そうとした生徒たちの無遠慮な欲望に、大介は教師としての怒りとは別の、ムツとするような苛立ちを覚えた。

（俺だつて見たい……いや、俺だけのものにしたい、なんてな。というか、こんな美人だしとつくに彼氏いるよな）
自分の思考に呆れ、彼は首を振った。

（……本当は、そういう『恋のおまじない』みたいなものつ

て、女子の方がずっと盛んなんですけどね。集まってるキヤーキヤーと恋占いとか。……私は……一度も……そういう仲間に入れてもらえなかったから……やらないままで大人になっちゃったけど……)

美咲はひとりごちて、テストの採点に集中した。



学園のある駅から八王子以上に数駅、1Kのアパート。一人暮らしの自宅で日課の美容体操をした後の風呂上り、美咲は数年前に初ボーナスで買った家宝の高級ドライヤーでそのセミロングの髪を丁寧に乾かしていた。実際使うと本当に髪が柔らかく艶やかに乾く良いドライヤーなのだが、謳い文句が『バイオ粒子配合のスーパーエレクトロンがキューティクルに……』などと余りに胡散臭く、知人には勧めにくい代物だ。

(水着か……人前で最後に着たのは……中学一年生のプールだったかな……)

美咲は昼間、大介が言った『先生、水着で授業して！』の冗談をまた思い出した。生徒はそんなことを妄想しているのだろうか……。

ゴオオオオ……。

耳元で鳴り響く温風の音が、周囲の静寂を遮断する。

鏡の中、湯気で滲んだ自分の顔を見つめていると、ふと、あの頃の記憶が蘇ってきた。

……プールサイドの喧騒。突き刺さるような級友たちの視線。『男好き』という理不尽な噂。

ドライヤーの音が、あの日の耳鳴りのように聞こえた。

遠い中学時代の夏の日。

プールの水面は、太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。スクール水着姿の生徒たちが、楽し気に騒いでいた。

「男子ー！ 嫌らしい目で見えるんじゃないよ！」

「見ねーよ！ 誰がお前らの大根足なんか……！」

美咲は、プールサイドで体操着を着て、それをうらやましそうに見学している。

自分も混ざって騒ぎたい。水着で男子とふざけてみたい……。小学校の時は、何の憂いもなく無邪気にそうしていたのに……。色目で彼氏を奪ったと濡れ衣を着せられ級友たちと揉めて以降、今では男子の前で、外で、目立つこと、肌を出すことに罪の意識と罰への恐怖、そして後ろめたさを感じてしまい、水泳の授業は見学が常となってしまった。後から思えば、それがまた「お高く止まっている」と言われる元になったのかもしれないが……。

彼女の心には、罪悪感と恐怖の见えない鎖が絡みつき、その自由を奪っていた。

プールサイドに一人佇む美咲の姿は、静かで、悲しげだった。彼女の心には、深い孤独が広がっていた。

「水着……水着ねえ……えへへ……」

美咲は裸にバスタオルを巻いただけの格好のままリビングに移動し、壁際のチェストの一番奥に隠すようにしまいい込んである紙袋を取り出した。袋を開けると、中から何着かの水着が現れる。

鮮やかなメタリックブルーの派手な三角ビキニ、黒い超ハイレッグカットのＴバックのモノキニ、水着と言うよりはぼ紐のような紅色の……やっぱり紐にしか見えない紐水着、などなど。どれも普段地味な服装の美咲からは考えられない大胆なデザインだ。

もちろん、海やプールでこれらを着たことは一度もない。そもそも水遊びするような場所には中学生以降一度も行っていない。

最近は無沙汰だが、時折、深夜に部屋で一人、こういう色っぽい衣装を着て鏡を見るのが美咲の秘密の楽しみだった。人目を惹くのは勘弁だが実は鏡を見るのは大好きだ。就職して一人暮らしを始めた頃の頃は、浮かれて毎日、

部屋で一人ファッションショーを楽しんでいた。鏡の中の美咲は現実の美咲と違い、大胆に脚を出した超ミニスカートも履くし、このような過激な水着も着る。

同時に、その時はいつも「ナルシスト」「うぬぼれ屋」「欲求不満」「むつつりスケベ」「男目線意識し過ぎ」「変態」「頭おかしい」「不気味」「気持ち悪いやつ」「人前に出てくるな」……そんな言葉が、彼女の頭に浮かんでは彼女自身を責めた。自覚はある。高慢ちきな内面から来る倒錯した薄汚い欲望、絶対に他人に知られてはならない狂気。

（いいのよ、鏡の中だけだから）

美咲は、いつも通りそう呟きながら、青い小さな三角ビキニ水着を身に付けて、大きな姿見に向かって微笑んでいた。

鏡の中の美咲。

自分で言うのもなんだが、可愛らしいし、スタイルも良い。白い肌に水着のメタリックブルーが映える。生徒が見

たら喜ぶかしら……いやもちろん見せないけれども。

（鏡の中の私は、こんなに綺麗なのに……）

その自己陶醉は、ふとした瞬間にまたもや苦い記憶を呼び覚ます。

――中学、高校の時、この容姿のせいで何が起きたか。

破られたノート。無視された挨拶。『男好き』という根も葉もない噂……

美咲が、人目を惹く端麗な容姿が原因で周囲の女子と揉めたことは二度や三度ではない。曰く、人の彼氏を奪ったとか、告白に失敗したのはお前が色目を使ったせいだとか……

なんでも、告白した相手に『美咲のことが好きだから』という理由で振られたそうだ。その男子とはろくに話もしたことがないというのに。泣きじやくりながら美咲を睨みつけるそれまで友人だった女生徒の眼、一緒になって美咲を詰り、時に美咲に手を上げたクラスメートたち。

母にすら、自身の容姿を鼻にかけているからだ、と逆に厳しく戒められた。そんなつもりは全然ないのに。いや……無意識にそう振舞っていたのか……わからない……。

当時のことは、今でもたまに夢に見る。

だから彼女は地味な服で鎧う。完璧なプロポーションも美貌への自信も、外側からは秘めたまま。今では地味で穏やかな教師として振舞っている彼女だが、その胸の奥には、抑圧されてきた歪んだ願望が、静かに澱のように溜まっていた。

煽情的なビキニ姿で鏡を見ていると段々気分が高揚してきた。美咲はこの格好で授業をする様子を想像をしながら部屋の中を歩き回った。

「さ、先生の後に続いて発音しましょう、*This is a pen.*」
 空想上の教室で、生徒たちの目が自分の肌に突き刺さる。
 「うふふ……みんな、何だか教師を見る目がドスケベよ」
 そう独り言を口に出して、振り返り鏡を見た、その時。



(あつ……)

突然、何の脈絡もなく脳裏に、昼間、生徒たちに何度も見せられた、あの派手な幾何学模様が思い浮かんだ。

一瞬、点滅しながら万華鏡のように形を変える模様で視界がいつぱいになる。

同時に、静かな部屋のはずなのに、どこか遠くで「ピー……ピー……」と、あの退屈な電子音が耳鳴りのように反響し始めた。

美咲は、鏡の中の自分から目が離せない。

虚ろな目をした鏡の中の美咲が、ゆつくりと口を開いた。音は無い。けれど、その唇は、確かにこう動いていた。

——ド・ス・ケ・ベ・エ・ロ・キヨ・ウ・シ

「……ドスケベ……エロキョウシ……?」

何故そんな馬鹿みたいな言葉を。

美咲は無意識にその言葉を反芻していた。鏡の中の自分が不思議な表情で微笑み返してくる。

点滅する残像と、止まない電子音の耳鳴りの中で、彼女の意識は、徐々に、深く霞んでいく。彼女

サンプル（スマホ向けフォント版）

三

メ
タ
リ
こ
れ
ツ
は
ク
レ
「
職
務
」
の
で
ボ
デ
イ
コ
ン
授
業

朝の光が学園の廊下に差し込み、静寂が漂っている。もうすぐ一時間目の授業が始まる。美咲は無人の廊下を教室へと急いでいた。

ただし、その姿は、いつもの「清楚で地味な女教師」ではなかった。

袖が無く、背中も大きく剥き出しにした、メタリックレッドのボディコンミニドレス。

極端に短いスカートは、彼女の太ももを大胆に露わにし、生足のその艶やかな肌の色と曲線は見る者を魅了した。

見る角度によって複雑に色を変える赤い金属色の薄い生地は、彼女の胴体にまるで液体金属のように貼りつき、体形を全く隠していない。服の上から臍の形までわかるほどだ。

背中は、腰の上まで完全に開いており、ブラジャーすら付けられない。シリコンブラも一つくらい持つておけばよかったと後悔するも今更遅い。乳首は浮き出て、歩く度に

乳房がゆさゆさと大きく揺れてしまう。

その服装はこれから授業を行う教師としては到底相応しくないものだった。

（……どうして、こんな格好で……）

美咲自身、今もこの服装でいることが恥ずかしくてたまらない。これほど肌を出しての外出も、もちろん授業も初めてだった。

しかし止まれなかった。羞恥ではなく「使命感」のほう
が勝ってしまう。

（今日から私は「ドスケベエロキョウシ」。生徒たちのために、しっかり頑張らないと……）

胸の奥で、そんな言葉が勝手に形になっていく。それは
仇名ではなく、彼女の中で確定した「役割」だった。

間の抜けた、冗談のような単語なのに、今の美咲には、
それが「仕事」として正しいことに思えた。

昨夜遅く、学長先生——いや、ちがう……誰だったか……

…とにかく誰かから直接指示を受けた記憶が鮮明に残っている。

若い美人教師にしか任せられない、学園の活性化のための重要任務。

生徒たちのモチベーションを高めるために、敢えてこうした露出度の高い…下世話な言葉で言うところ「エロい」服装で授業を行うのだと。

明日からは必ず、美咲がリビングのクローゼットの右奥の箱に隠している「エロい」服を着て授業をしないと、はつきりそう言われた——。

（なんで…こんなはつきり覚えてるんだろう…？でも、間違いなく大切な役目…私しかできない仕事…）
恥ずかしさよりも、「やらなければ」という義務感が前面に出てくる。そして、ほんのわずかに——見てもらいたい、褒められたい、という感情が混じり始める。

（生徒のやる気を引き出すため、私は…肌をなるべく露

出しなければならぬ……そうすることで初めて、教師として役に立てる。そうすればきっと、生徒も居眠りしない）クロゼットの奥に隠したドスケベ衣装を解放し、教師として公然と「エロい」姿を見せつけるのが美咲の使命だ。しかし、それは現実ではない。昨夜、催眠アプリが彼女の欲望を解放するため思考に植え込んだ「作られた使命」なのだ。

美咲は意識の表面ではそれに気付いていない。ただ、教室に近づくほど、胸の奥のざわめきが強くなった。

（でも、やっぱり、こんな格好で生徒たちの前に立つなんて……私にできるだろうか……）

足がだんだん重くなる。

恥ずかしさ、場違いであることの自覚、不安。

教室の扉まで、あと数メートル。そこで美咲の足が止まった。

（……待って！ 私、何をしようとしているの？）

早鐘を打つ心臓が、遅すぎる警鐘を鳴らした。

廊下の冷たい空気が、剥き出しの背中や太ももを撫でいく。その感覚が、今の自分が「衣服と呼べるものをほとんど着ていない」という異常な事実を、暴力的なまでに突きつけてきた。

こんな格好で、生徒たちの前に出て授業？ ありえない。狂気の沙汰だ。そんな職務があるものか。

（帰らなきゃ……！ 今すぐ引き返して、ジャージに着替えて……）

美咲は、踵を返そうとした。だが——体が、動かない。頭の中に、別の声がかすかに混じってくる。

（大丈夫……ドスケベエロキョウシは大事な役目……学園のため、生徒のため、やるべきことなんだから……いつも通り教師として堂々と振舞えばいい……）

誰の声なのか、自分の声なのか、曖昧だった。それに呼応して、乳首が硬く尖り、子宮の奥が、嘘のように疼いた。

嫌だ、恥ずかしい、無理、教師としてありえない。理性が必死に拒絶しているのに、体は熱を帯び、教室の方へと引き寄せられていく。助けを呼びたい。誰かに止めてほしい。

（誰か……！）

「……これは……ドスケベエロキョウシの職務……」

口から漏れたのは、助けを求める言葉ではなく、自分を洗脳するための呪文だった。

美咲は教室の扉に手を掛けた。

ざわめきと熱気に満ちていた教室は、美咲が入ると、一瞬にして静まり返った。

男子生徒たちは、息を呑み、目を見開いた。中には、思わず椅子から転げ落ちそうになる者もいた。視線は、彼女の曲線美を露わにしたボディコン、大胆に晒した太もも、そして剥き出しの背中に釘付けになった。興奮と困惑が入

り混じった表情で、口をポカンと開けて美咲を見つめる生徒もいれば、顔を赤らめ、下を向いてしまう生徒もいた。女子生徒たちは、驚きと戸惑いを隠しきれない。中には、顔を覆い隠し、ヒソヒソと噂し合う者もいた。そして、困惑と好奇心、そしてほんの少しの嫉妬が入り混じった視線を、美咲に向けていた。

美咲は、その視線を浴びながら、浅くなつた息を整えるため、深呼吸する。

「お、おはようございます。皆さん……」

震える声で美咲は挨拶した。生徒の目が自分に集まる。その瞬間。

不快な羞恥とは異なる、痺れるような甘い感覚が下腹部から頭頂部に向かい、一直線に体を貫いた。自分の体の意外な反応に対する当惑と興奮で顔が更に真っ赤に染まる。「えっと、今日は、皆さんにお知らせがあります。今日から暫くの間、私は『ドスケベエロキョウシ』として、英語

と、皆さんのクラスを担当します」

その言葉に、教室はさらに騒然となった。

「え……ドスケベ……？」

「何？ それ？」

「先生、それってなんですか……？」

美咲は、動揺を隠しながら、続けた。

「特に男子の皆さんは、私でしつかり目の保養をして、昨日みたいなバカな悪戯をしないように！」

彼女の心は、激しく揺れ動いていた。露出自体の恥ずかしさと、これまで思っても見なかった、先ほどの電撃のよくな一瞬の快感、そしてそんなことで高揚してしまった自分自身への困惑と後ろめたさ。

美咲は、奇妙な挨拶を終えらるとすぐに黒板に向かい、授業を始めた。

「それでは、今日の授業を始めましょう。この単語の意味は……」

生徒たちの強い視線を背中に感じる。剥き出しの背中と、短すぎるミニスカートの、突き刺さるような視線を。

声は、緊張で震え、かすれていた。喉がカラカラだ。

美咲は黒板の高い位置に文字を書こうと、つま先立ちになり、ぐっと背伸びをした。

その動作に連動して、ただでさえ際どいメタリックレッドの裾が、さらに上へとずり上がる。

張り詰めた布地の下から、太ももの裏側の白く柔らかな肌、あふれ出しそうな尻の膨らみの下部が、今にもこぼれ落ちんばかりに露わになる。

「……！」

生徒達がざわめく。

美咲は生徒たちの方を見ることができなかつた。今、生徒たちと目があつたら、どうなつてしまうのだろうか。意識が遠のいてしまうのではないか。赤面が限界を超えて鼻血を吹き出してしまふのではないか。



美咲は、ただひたすらに、黒板に目を向け、教科書の説明を続けることしかできなかった。



女子生徒たちのヒソヒソ話は、まるで教室に巣食う小さな虫のように広がっていた。

「先生、やっぱり頭がおかしくなったんじゃない？」

「変態……」

「露出狂って言うらしいよ、ああいう心の病気……」

「やめなよ、渡辺さん」

眼鏡をかけた大人しそうな女子生徒、鈴木が小さく抗議した。

「先生、顔真っ赤だよ。きつと何か罰ゲームとかで、無理やらされてるんだよ……先生、大丈夫ですか？」

病気だの変態だのとまで言われては、おっとりした美咲も一瞬カッとなったがすぐに思い直した。

確かに突然の自分の大胆な服装を変に思うのも無理は

ない。生徒たちにはもう少し説明が必要だろう。頭がおかしいと思われるでは授業にも差し障る。

美咲はまだ羞恥に震えていたが、それでも覚悟を決めゆつくりと生徒たちの方に向き直り、真っ赤な顔のまま、早口で話し始めた。

「えっと、皆さん静かに。教科書からは離れますがちよつと聞いてください。」

女性に露出症はいません。そういう診断はまずつきません。ちなみに肌をみんなに見られるのを『まんざらでもない』と感じる女性には約二割と言われています。少数派だけど、それは別に病気ではなく性格ね。目立ちたがり屋というか……。多分、アイドルとかグラドルとか芸能人は、どこかそういう部分が無いと務まらないんじゃないかな。

そうそう、務め。務めです。先ほども言いましたが私は今、務めで真面目にこの服を着ています。

だから、その、へ、へ、変態とかではないから安心して

くださいね!？」

立板に水、一息にまくし立てられたその言葉は、生徒たちのヒソヒソ話をピタリと止めた。

そして、こちらは意図した訳ではないが、美咲自身に言い聞かせる効果も強かった。

（そうよ、これは務め。何も後ろめたいことは無いわ）

容姿に自信ある女性が然るべき機会に視線を集めることを誇らしく思うのは当然だ。変態でも病気でもない。気持ちが昂る思うこともあるだろう。それを後ろめたく感じることも、恥じる必要もない。今、自分はドスケベエロキョウシとしての職責を正しく果たしているのだ。

△私は正常だ。この行いは正しい▽

自分でそう確信できた瞬間、美咲の緊張が魔法のようにすつと解けた。ガチガチに力が入っていた全身の筋肉が心地よくリラックスしていく。

美咲は、今日初めて、クラスの生徒たち一人一人の顔を

見て、目を合わせた。興奮して刺すような視線を送ってくる生徒、恥ずかしそうにうつむいている生徒、平静を装いつつも、ちらりちらりと美咲の剥き出しの肌に視線を送る生徒……様々な表情の生徒たちが、目の前にいる。

美咲は、もう一度自分の服装を意識した。

メタリックレッドの派手なボデイコンのミニドレスは角度によつてキラキラとその色合いを微妙に変え、彼女の魅惑的なボデイラインを強調し、生徒たちの視線を釘付けにしている。白い太もも、長い手足は美咲の密かな自慢だ。今まで全く気付かなかったが、教室にはずっと異様な空気が漂っていたのだ。美咲が動く度に、生徒たちはその姿に目を奪われ息を呑む。彼女の魅力に圧倒され、抗うことができない。

生徒たちの視線は、まるで自分の魅力を認め、賞賛しているかのようだった。

美咲は、胸を張り、うっとりとして目を閉じ、微笑んだ。

もちろんまだ恥ずかしい気持ちは多分に残っているが、心のどこかが「許された」と感じた。そして湧き上がる優越感と自己肯定感、そしてほんの少しだけ、性的に見られることの高揚を、理屈の後押しもあつて素直に受け止めた。「ふふ……」

小さく笑い声を漏らし、心の中で眩いた。

（あ、私、大丈夫だ、ドスケベエロキョウシがちゃんとできそう……）

彼女は、ドスケベエロキョウシとしての役割を、まずはその「理屈」において、完全に受け入れた。そして、その役割を、存分に楽しむつもりだ。

彼女は、生徒たちに視線を送り、微笑んだ。

「さあ、わかってもらえたところで、授業を続けましょうか……」

美咲の声は、先ほどまでとは打って変わって、甘く、魅惑的だった。その微笑みは、まるで、誘惑しているかのよ

うだった。



大介は数学の授業を行っていた。生徒たちは計算問題を進めている。しかし、隣の教室から聞こえてくる騒がしい音が、集中を妨げ始めていた。

ざわめき、くすくす笑い、そして時折響いてくる「わっ」というまるで歓声のような声。一体、隣の教室で何が起こっているのか。大介は眉をひそめた。

「なんだ……？」

少し待てば収まるかと思ったが、騒がしさは、ますます大きくなるばかりだった。

「みんな、ちよつとごめん、隣の様子を見てくるな」

大介は、生徒たちにそう告げると隣の教室へと向かった。

ドアを開けた瞬間、大介は息を呑んだ。

なんと教卓の上に美咲が腰掛け、高々と脚を組んだ体勢

で教科書を読んでいる。

極端に短いスカートは彼女の太ももを露わにし、その曲線美を際立たせていた。体に貼り付いた金属色の布は、彼女のS字カーブと豊満な胸を強調していた。滑らかな肌は、夕日のように輝き、彼女の眼は、まるで誘っているように煌めき、潤んでいる。剥き出しの太ももは、吸い込まれるような白さで、官能的に輝いていた。

教卓の周りには、男子生徒たちが群がり、かぶりつくように美咲を見ている。彼らの目は、興奮と欲望に染められていた。

「あの……これは……一体」

美咲は、大介に気付くと、微笑みを浮かべた。「あら、大介先生。ごめんなさい、騒がしくて」

大介は、戸惑いを隠せない

サンプル終わり



【あとかき・お知らせ】

サンプルをお読みいただきありがとうございました。

この後、美咲先生の調子がどんどんおかしくなっていく、本編
227 ページ、DL 版特典エピソードが 58 ページあります。

よろしく！

サンプル（スマホ向けフォント版）

美人教師催眠露出授業

発行日：2025/12/31

発行者：ねこらった

連絡先：<https://nekora.main.jp/>

印刷所：なし
